白山ふるさと文学賞

第十三回　白山市ジュニア文芸賞　受賞作品

【暁烏敏部門】〈作文「母へのおもい」または「家族へのおもい」〉

小学生3・4年の部　優秀賞

「大好きな妹」

東明小学校四年　大黒（だいこく）　愛夏（あいな）

八月のある日曜日、私の家に赤ちゃんが来た。わたしの妹だ。わたしは、とてもカワイイ子だと思っていたが、わたしが赤ちゃんの顔を見た時は、すごくびっくりした。赤ちゃんは、「こうしんれつ」という病気で、口びるがさけていて、こわかった。赤ちゃんの上口びるは、二つに切れていて真ん中に丸いだんごのような、できものができていた。わたしはちょっと不気味に感じた。でも、弟たちはカワイイと言って、だっこをしていて、わたしは、すごくドン引きした。

数日たったころ、わたしは、妹が少し、かわいく見えてきた。妹はだっこをすると、わらったような顔をする。手をさわると、とても小さくて、やわらかかった。ミルクを妹にあげてみると、少ししか飲まなかったが、うれしそうな顔をしていて、わたしもつられてうれしくなった。

そして、半年がたった。わたしは、妹のことがすごく大好きになっていた。けれど妹は体重が全然増えなくて、家族みんなが心配した。母は大きな病院に連れて行ってみてもらうことにした。妹は、「心ぞう病」という大きな病気だった。母はショックを受け泣きくずれており、わたしはすごく心配した。わたしも、もちろん妹の病気に関しては、すごくショックで、どうすればいいのかまったくわからなかった。夜に父が子供たちを集めて話をした。その話は、「母は、今、心の病気で、しんこくなじょうたいなので、母にあまりめいわくをかけないように。」と言うことだった。それを聞いてわたしは、妹は、とてもたいへんなじょうたいであり、大人でさえどうすればいいのか、わからないことになっているんだなぁと思った。それでもわたしは、長女だから、前向きな気持ちでいなきゃいけないなぁと思い笑顔でいた。友達に妹のことを相談してみると、びっくりした顔で、「それは、やばい、ね。」と言われた。妹は、重い病気でも、笑顔でわたしたちをむかえてくれた。その笑顔を見て、わたしは、早く元気になって遊んだり、散歩をしたり、したいなぁと思った。

そして三月の春休み、ついに手術の日が来た。わたしは、本当に成功するのかと心配で神様にいのっていた。

手術は成功した。

入院している間にビデオ電話がかかってきた。妹はニコニコとした笑顔をみせてくれた。うれしすぎて、大声で妹の名前を、何度もよんでいた。

数日後、妹が家に帰ってきた。うれしくて、妹にすごいいきおいで、だきついていったら、母に止められ、「そんな、いきおいで、だきついたらびっくりするでしょ」と注意された。それでも、がまんできずに、だきついて、手術が成功したことをよろこんだ。手術が成功した妹は、ミルクをたくさん飲むようになって、どんどん成長して、家族みんながよろこんだ。

そして、体重が六キロになった六月。妹はこうしんれつの手術をすることになった。入院の時は、またテレビ電話をした。妹は色々な線につながれて、息が少しつらそうだった。手術の後、病院にお見まいに行ったが部屋に入れず病院の待合室で、テレビ電話をした。この前より息が楽そうで、線が少なくなって笑顔を見せてくれていたので、楽になったんだなぁと思った。数日後ＩＣＵを出て、普通の部屋に父といる妹とテレビ電話をした時は、鼻の中に何かが入っている様な感じだった。妹が退院してきた時またわたしは、妹にだきついた。もう手術はないんだなぁと安心してだきついた。そして妹の顔を見た時は、あまりいわかんを感じなかった。鼻の下の切れ目がなくなって、わたしたちみたいに、口びるの上がつながっていて、人間の顔になっていた。

世の中には、足がなかったり、目が見えなかったり、妹みたいに、口がさけている人もいます。でもそれも人々の個性だと思いました。だからわたしは、障害の人や病気の人にもやさしくして関わっていきたいなぁと思いました。

妹は、八月で一さいになりました。妹の病気によって家族のきずながより深まったと思います。わたしは、妹や両親や二人の弟が大好きです。これからも、ケンカがあっても、家族と仲良くしていきたいと思います。